

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

幼児およびその親を対象とした性教育の教授プラン
の開発とその実践(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): 性教育, 幼児, 幼児を持つ親, 教授プラン キーワード (En): 作成者: 小林, 益江, 石田, 智恵美, 石松, 直子, 佐藤, 珠美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000264

著作権は本学に帰属する。

幼児およびその親を対象とした性教育の教授プランの開発とその実践(1)

A development of teaching plan and the examination of sex education
for preschool children and their parents

小林 益江 石田 智恵美 石松 直子 佐藤 珠美
Kobayashi Masue Ishida Chiemi Ishimatsu Naoko Satou Tamami

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要約

幼児とその親を対象として性教育を実施した。教授活動の前、直後および1ヵ月後に行われた調査により、対象児の実態として、男女の違いや大人との違いについて気付きはじめており、幼児によっては、教授内容について簡単に暗記できる事柄については、記憶にとどめようとする行動が見られた。しかし、生命の大切さといった、抽象的な事柄については理解することは難しいという傾向が見られた。一方、親の実態としては、家庭で意図的に性教育を行っている親は1名のみで、それ以外の親は子どもからの性に関する質問に対して、答えを準備できていないため困惑する傾向にあった。受講後1ヵ月までの様子を見てみると、対象児は友達や親への行動に変化がみられ、親は性に関する情報交換を行ったり、子どもからの質問に対して前向きに対応する姿勢がみられた。これらのことから、今回教授した事柄が、対象児とその親の行動に変化を与えていたと推測できた。しかし、どの教授項目が行動の変化にどの程度寄与していたのかは不明確である。今後、教授効果を精査するために、教授内容に沿った発問系列を再検討していく必要性が示唆された。

Key Word : 性教育 幼児 幼児を持つ親 教授プラン

I. 問題と目的

細谷によると、人間は「人生のいかなる時期においても、自己を取り巻く大自然や社会環境との交渉なしには生活しえない。そして、その交渉の経験は、常に必ずなんらかの一般化や関連づけを伴って内化され、以後の問題解決や問題発見の様相を変化させていく」¹⁾ という。さらに、人間が獲得する知識について、「個別的な経験からも、それを一般化して『きまり』をつくり上げ、それを構造化しないではいられないという傾向を、生来的に持ち合わせている」²⁾ という。つまり、人間は知識を構造化しようとする傾向があり、その知識構造は、学習された事柄や、環境、あるいは情報などによって変化すると考えられる。さらに久米は「ヴィゴツ

キーの発達最近接領域説³⁾」を引用し、人間は「それぞれ、その時点での発達水準に存在しており、その水準に応じて知識構造が異なる」という。そして、「異なる知識構造を持つがゆえに、人によって受け取れる情報や知識が異なることになる」⁴⁾と主張する。従って、教授者は学習者の知識構造を推定し、受け取れるような知識を選択し、与えることが必要となるのである。

ところで、幼児は、1歳過ぎから小学校入学までの時期の子どもを指し、1～3歳は年少幼児、4～6歳は年長幼児と呼ばれるのが一般的である⁵⁾。年長幼児では、使う言葉の数が飛躍的に増加し、日常生活に不便のない程度の話し言葉が使えるようになるという⁶⁾。発話がみられることから、ある程度の記号操作はできることが推測され、その基盤として構造化された知識が推定できる。そして、この知識構造を緻密にすることが教育の役割とみなされる⁷⁾。それゆえ、幼児との応答場面においてどのような応答をするのか、ということが幼児の知識構造の変化に影響を与えものと考えられる。

一方、幼児から質問された事柄に対して、単純に正しい答えを与えていくことが、その後の幼児の知識の獲得を促し、概念を広げていく上で重要であり、教育的であると考えられがちである。しかし、前述のように、質問した時点での幼児の知識構造を無視した場合には、与えた答えが無意味なものになってしまう可能性がある。つまり、いくら正しい答えを与えたとしても、その答えに対応できるような知識構造を持っていなければ、幼児にとっては受け入れがたく、全く役に立たないのである。逆に、幼児の知識構造の精緻化を促すためには、幼児のその時点での知識構造に対応した知識を与えることが必要不可欠なのである。

さて、幼児期には、『男らしさ』、『女らしさ』と言い表されるような行動パターンの基礎が決定され、性別意識がはっきりしてくる⁸⁾と言う。また、「性器や排尿のしかたが違い、男女の外見（服装やヘアスタイル）の違いなどの性に関する質問も増える。この時期には、これらの違いがあることに気付くことで自分の性を自覚するようになる」⁹⁾と言われている。幼児の生活範囲を考えると、親あるいは通っている幼稚園または保育所などで質問する可能性が高く、とりわけ、幼児と長い時間を過ごしていると推測される母親に質問するケースが多いと考えられる。一方、幼児を持つ親は、当然のことながら教授者ではないため、家庭において意図的・計画的に性に関する教育的な関わりを行えるとは考えにくく、むしろ、幼児からの質問に偶然応じる形で、性に関する「お話」をしているのが現状であろう。このような場合、あらかじめ答えを準備することは不可能であり、その上幼児のその時点での知識構造を考慮した応答が行えるとは考えにくい。そのため、親が幼児に対して適切な答えを常に与えられるとは限らないのである。

家庭における性教育に関して、村瀬は、「親も性について語ってやれるほどによく学んでおいてほしいが」と前置きをした上で、「親として、大人の男と女としての存在のし方、夫婦のかかわり方、子どもへの接し方などそうしたことすべてが子どもの性をよくも悪くも育ててい

て、その影響力は親が思っている以上に大きいものである」¹⁰⁾ という。つまり、意識的・意図的に、性に関して語る・語らないは別として、親は自らの行動によって子どもに性教育をしてしまっていることになる。従って、親にとっては正しい「答え」を用意する努力よりもむしろ、性に対する考え方や家庭での性教育の方向性を見いだすことのほうが重要であることが示唆される。

また、性教育は、松本によると、「単に生理学的、解剖学的教育のみではなく、人間関係における人格のふれあいを含む広い意味での『人間の性 human sexuality』の教育」である、従って、「単に学校教育だけでなく、さまざまな場所で、さまざまな形で行われる生涯教育でなければならない」¹¹⁾ という。このことは、性教育の教授プランは、生理学的・解剖学的な知識を基盤として開発される必要のあることを示している。さらに村瀬は、子どもにとっては、「自分や人のからだ・性器をプライバシーとして大切に考える基礎を育むことが重要である」¹²⁾ とも言っている。従って、自分や人のからだ、ひいては命の大切さを教えようとするならば、リプロダクティブ・ヘルスの中心を担っている助産師こそが、教授プランの開発を進めていくべきであろう。

これらを踏まえるならば、幼児に対する性教育は、幼児自身を対象とすることはもちろん、その生活の中心をなす家庭を担っている親に対しても、性教育の方向性を見いださせるための教育が必要となる。

本研究は、幼児とその親に対する性教育の、教授活動における内容の妥当性と方略の有効性を検討すること、さらに、今後の幼児とその親に対する性教育の方向性を探ることを目的としている。残念ながら、筆者たちには、幼児の実態や知識構造に関する情報が欠けている。従って、今回は幼児およびその親の実態を把握することを主な目的として、本研究は計画された。

Ⅱ. 教授プランについて

前述したような幼児の前提知識や、親の家庭での役割を踏まえるならば、幼児とその親を対象とした、性教育の教授目標と内容、ならびにこれらを踏まえた方略は次のようになる。

1. 目標

＜幼児に対して＞

- 1) 4～5歳児にとって関心のあると予測される、男女の違いや性器の違いについて学ばせる。
- 2) 受精から赤ちゃんが誕生するまでのプロセスについて理解させ、生命の大切さ、身体の大切さ、ひいては自分自身や人を大切にすることを学ばせる。

＜親に対して＞

- 1) 自分自身の性についてどのように考えてきたかを振り返らせる。
- 2) 4～5歳児の成長・発達の状況や性に関する関心の程度などを理解させる。

3) 家庭での性教育に関する方針を見いださせる。

2. 教授内容

＜幼児に対して＞

対象幼児へのお話は、幼児期の性への関心の状況を前提として、教えるべき事柄（命の大切さ、身体の大切さ）を考えると、まず、男女の違い、性器の名称、受精から赤ちゃんの誕生までのプロセスについて、命の大切さや身体の大切さに結びつけて考えられるように構成する。

＜親に対して＞

親への講義は、まず、幼児の一般的な成長・発達状況と、性への関心の状態について教授し、自分の子どもの成長・発達等について見直してもらう機会を設ける。次に、子どもからの性に関する質問を受けた時の対応方針について、例を挙げながら、具体的に対応方法を教授する。

3. 教授方略

対象児の性に関する知識がどのように獲得されているのかについては、あらかじめ知るとは困難である。なぜなら、直接問いかける事柄には限界があり、さらに、親に尋ねても子どもの知識の獲得状況について、十分に答えられるとは限らないからである。従って、あらかじめ知識として獲得されているであろうと推測されることを手がかりに、教授活動を行って、その結果から対象児の実態を再確認する。

また、幼児を対象としたお話を親にも聞いてもらい、教授する内容とそれに対する対象児の反応を親が知ることにより、家庭での性教育の参考にしてもらう。さらに、親が知りたいこと、困っている事柄については、自らの解決を促すため、親のみを対象とした講義とディスカッションを行う。

4. 対象幼児の年齢決定

言葉による説明が理解できる（記号操作が可能である）ことを前提とし、しかも、30分程度のお話を聞くことができるという条件を考慮し、4～5歳とする^{注1}。

5. 親子の人数

幼児を主な対象としたお話の後、親のみを対象とした講義とディスカッションを計画する。そのため、ディスカッションが効果的に行われるためには、構成人数として10名以下が適当と考え、募集に際しては定員を10組とする^{注2}。

6. 時間配分

一般に4歳を過ぎると興味ある遊びなら、平均して1時間から1時間半くらいはつづけられるのが普通であると言われている¹³⁾。今回は教材に紙芝居を使用し、座ってお話を聞く形式とするため、1時間以上になると途中で興味を失う可能性がある。従って、4～5歳児を対象としたお話は30分程度とする。

Ⅲ．受講前調査

受講前調査は、受講親子の実態を知る目的で行われた。

1. 対象：参加した母親全員（8名）
2. 方法：質問紙を用いて、講座の開始前に記述を求めた。
3. 調査項目：一般的な幼児の性への関心などから推測される事柄を確認するために、次の項目を選んだ。
 - ① 子どもの性に対する関心の状況
 - ② 子どもからの性に関する質問の有無と内容
 - ③ 子どもから性に関する質問を受け、返答に困ったことの有無とその内容
 - ④ 家庭での性教育の実施状況
 - ⑤ 親自身の性についての考え
 - ⑥ 親の受けた性教育の状況
 - ⑦ 受講の動機
4. 結果・考察

1) 子どもの性に対する関心の程度について

子どもが性に対して「関心がある」と答えた親は4名だった。「分からない」と答えた親は3名、「関心がない」と答えた親は1名だった。関心があると答えた主な理由には、「下の子どもが生まれてからずっと、赤ちゃんはどこから生まれてくるのか不思議（がっている）」、「胸が大好き。異性に興味がある」という、親から見た子どもの状況が記述されていた。一方、関心がないと答えた親は、兄7歳と妹4歳のきょうだいで、「下の子はまだ訳がわからないで（異性、同性を意識しないで）兄と遊んでいる」と記述していた。

この項目は、母親と子どもが一緒にいる時間や、子どもが母親の言動をどのように解釈したかに影響されるので、単にこれらの回答だけでは、関心の程度については判断が難しい。

2) 子どもからの性に関する質問について

性に関する事柄を質問されたことが「ある」と答えた親は6名、「ない」と答えた親は2名だった。質問の内容は「赤ちゃんはどこから生まれてくるのか」、「どうしてお母さんには月経があるのか」、「男の人はおちんちんがあるけど、女の人はどこからおしっこするのか」、「なぜ毛（陰毛）が生えるのか」であり、幼児が男女の違いや自分と大人との違いについて気づき始めていることが伺えた。

3) 家庭での性教育の実施状況

家庭で性教育を「している」と答えた親は1名だった。この親は、「子ども（女兒）も卵（子）をもっていると教えた」と、意図的に関わっていると推測される記述をしていた。「時々している」と答えた親は6名だった。その内容は、「子どもから質問されたとき、わ

かる範囲で答えている」、「男女のきょうだいなので、(男女の)違いと、してはいけないことを気付いたときに言っている」と記述されており、予想通り、意図的・計画的には関わっていないと推測された。

4) 子どもからの性に関する質問を受け返答に困ったことについて

返答に困ったことが「ある」と答えた親は4名、「ない」と答えた親は3名だった。返答に困った質問内容は「月経時の出血について聞かれ返答に困った」、「赤ちゃんが生まれてくる穴があるの?にそうよと答えたものの、それ以上聞かれるとどうしようかと考えてしまった」であった。質問項目3)の結果とを合わせると、意図的・計画的に性に関して話をしていない親は、子どもからの質問に対しての答えを準備してはならず、返答に際して困惑している状況が推測された。

5) 親自身の性についての考え

性について話すことを「とても肯定的」に考えていると答えた親は3名、「肯定的」と答えた親は4名だった。その理由については「性のことを正しく知っておく必要がある」、「知らないことが一番怖いこと。正しいことを教える必要がある」、「(子どもが)性被害にあわないように」、「以前は否定的だったが最近は子どものためにも前向きに努力している」であった。

6) 親の受けた性教育の状況

小学校で性教育を受けた親は7名で、担任の教師および養護教諭が担当していた。中学校では6名の親が性教育を受けており、養護教諭に加えて体育の教師が担当していた。高校では、体育教師から性教育を受けたと答えた親が2名だった。家庭では、小3、7～8歳、12歳のころ母親から(3名)、4歳のころ両親と兄から(1名)、一方「あまりきちんと教えてもらった覚えがない」と答えた親は1名だった。

7) 受講の動機について

以下、自由記述から引用する。

「子どもの自慰行為をみて、性の重要性をわかりやすく説明したいと思った」、「子どもにどのようにどこまで話してよいのかわからなかった。また、今後一人で行動するようになるため、心配だから」、「上の子が6年生(男児)で、思春期を目の前に心の準備をしたかった」、「4～5歳の子どもにどのようにお話してくれるのか、興味があった」、「幼児の被害が多くなってきたので、性犯罪を受けることのないように心構えをしたいと思って」という記述内容であった。受講の動機の1つに、子どもに何をどこまで話したらいいのか、その基準を獲得したいという理由があったと推測された。

IV. 教授活動の実際

1. 実施期日など

日時：2002 年 8 月 29 日 13：30～15：30

場所：M 202 会議室

参加者：幼児 11 名（4 歳－5 名、5 歳－3 名、7 歳－1 名、9 歳－1 名、11 歳－1 名）

母親 8 名

2. 教材

紙芝居（男女の違い、受精のメカニズム、赤ちゃんの誕生などを表す絵）

男女の赤ちゃん人形

親を対象として行われる講義の資料

子ども向けの性教育の絵本 8 冊

3. 展開

(1) 本講座の進め方について説明

(2) 事前アンケートの実施

(3) 第 1 部（幼児を対象）30 分

紙芝居と赤ちゃん人形を用いて、男女の違い、受精のメカニズム、赤ちゃんの誕生、身体の大切さ、生命の大切さ、についてお話をした。お話の形態は、床に半円状に幼児を座らせ（写真 1. 受講前の様子、写真 2. 受講中の様子、参照）、話し手も座って実施した。お話の途中では、意図的に発問し、幼児の応答を見ながら進めた。お話の終了後、幼児は別室の遊び場で遊ばせた。

(4) 第 2 部（親のみを対象）

① 講義 30 分

4～5 歳児の発達・特徴・性に関する関心の状況や、幼児によく聞かれる質問とその質問に対する回答の仕方などについて、具体例を挙げながら説明した。

② ディスカッション 50 分

親 8 人と担当者 4 人全員で円形になり、親同士で子どもの性に対する関心の状況や、困っていることなどについて、自由に話し合い、必要時担当者が意見を述べた。

なお、教授活動は承諾を得て、ビデオカメラによって記録された。

V. 受講直後調査

受講直後調査は、親から見た子どもの教授内容に関する理解度、親自身の教授内容に関する理解度や性に対する考えの変化などを知り、教授活動の評価に使用する目的で行われた。

1. 対象：参加した母親全員（8 名）

2. 方法：質問紙を用いて、受講後、会場内での記述を求めた。

3. 調査項目：調査項目は、事前調査との関係をみるための①～④と、受講後の感想と意見を加えた。

- ① 親から見た、子どものお話の理解度
- ② 親自身の性に対する考えの変化の有無
- ③ 4～5歳児の発達・特徴・性に関する関心の程度等、親の理解度
- ④ 家庭での性教育の方針が見いだせたか
- ⑤ 受講後の感想や講座に対する意見

4. 結果

1) 親から見た子どものお話の理解度について

① 男女の違いについて

「よくわかったと思う」と答えた親は4名、「少しはわかったと思う」4名だった。

② 受精のメカニズムについて

「よくわかったと思う」と答えた親はいなかった。「少しはわかったと思う」5名、「あまりわかっていないと思う」2名、「まったくわかっていないと思う」は1名だった。

③ 赤ちゃんの誕生について

「よくわかったと思う」と答えた親は1名、「少しはわかったと思う」5名、「あまりわかっていないと思う」2名だった。

④ 身体の大切さについて

「よくわかったと思う」と答えた親はいなかった。「少しはわかったと思う」7名、「あまりわかっていないと思う」1名だった。

⑤ 命の大切さについて

「よくわかったと思う」と答えた親はいなかった。「少しはわかったと思う」6名、「あまりよくわかっていないと思う」1名、「まったくわかっていないと思う」1名だった。

子どもの理解度については、親が推測した間接的な尺度であるため、度数の多少で対象幼児の理解度が直接測定できるわけではない。むしろ、親にとってのお話のわかりやすさ、難しさという印象が影響しているとも考えられる。間接的な尺度であるということとを考慮した上でまとめると、抽象度が高く、知識を結びつけることが必要と予測される項目は、度数が低くなっている。逆に、すぐに覚えられるような事柄については、理解度が高いと親には思われているようで、今後、教授内容の構造化については再検討する必要がある。

2) 親自身の性に対する考えの変化

① 性に対して考え直すきっかけになったかについて

「とてもなった」3名、「少しなった」5名だった。そう思った理由については、「子どもに性を教えることに抵抗がなくなった」、「正しいことをあたりまえのように普通に話すことが大切と確認した」という記述が見られた。

② 性についての考え方について

「とても肯定的」と答えた親は4名、「肯定的」4名だった。

③ 4～5歳児の発達・特徴・性に関する関心の程度等、親の理解度について

「とても理解できた」と答えた親は3名、「まあまあ理解できた」5名だった。そう思った理由については、「(ディスカッションの中で) 受講者の具体的な話がとても役に立った」、「話し合いの中で考える余裕ができた」、「他のお子さんの様子を伺うことができた」という記述が見られ、ディスカッションでの意見交換が効果的だったことが推測された。

④ 性教育の方針を見い出せたかについて

「見い出せた」と答えた親は3名、「少し見い出せた」5名だった。そう思った理由については、「躊躇せず、自信をもってできそう」、「聞かれたことについて少し考えて、間をおいて話してあげようと思った」という記述がみられた。

⑤ 受講後の感想や講座に対する意見

記述されたものを以下に列挙する

- ・性被害に遭わないように、性器や体の大切さを子どもに具体的に説明してほしかった。
- ・発達段階に応じて、少しずつ、くわしく教えて欲しい。
- ・子どもの年齢幅をもう少し広くとってもよかったのでは？そうすればもう少し受講人数も多かったと思う。できれば午前中の時間帯がよい。
- ・子どもは赤ちゃんが誕生することに一番関心があると思う。
- ・教材は、ペープサートなどの動きのあるものが子どもにとってはわかりやすかったのでは？
- ・大人への性教育もしてほしい。

VI. 受講後1ヵ月調査

受講後1ヵ月間に、子どもおよび家族が性に関して、どのような変化があったかを知り、教授効果をみる目的で行われた。

1. 期間：2002年10月3日～10月9日
2. 対象：受講した母親の中から承諾が得られた5名
3. 方法：電話による聞き取り調査
4. 調査項目：

調査項目は、受講前・直後調査との関連で作成し、実際にどのようなやりとりが親子間でなされたかという項目を追加した。

- ① 受講当日の子どもの反応で印象に残っている事柄
- ② 受講後1ヵ月間の、子どもおよび家族の変化の有無

- ③ 子どもから受けた質問の有無とその内容、及びそれに対する返答
- ④ 受講した内容が役に立ったか否か

5. 結果

聞き取った内容は、次のようにまとめられた。

1) 受講当日の子どもの反応について

「帰るときに、精子と卵子はなんだったっけ？、赤ちゃんのもとが気になって、家に帰って大事なことからといって、書き留めていた」

「性に関する絵本を見ていた」

「大人のおちんちんが大きいこと、紙芝居の内容について話していた」

「4歳になったばかりなので、よくわかっていなかった。遊びに行っていたと思うようだ」

2) 受講後1ヵ月間の、子どもおよび家族の変化について

① 母親の変化

- ・女の子（同性の子ども）を持つお母さんと話をするようになった。
- ・主人と話をした。
- ・（母親が）性器の名前をはっきりいうようになった。
- ・大人のための性講座を以前に受けた。今回は再確認になった。

② 父親の変化

- ・レジュメを見た。子どもからの質問にきちんと答えていた。
- ・興味がなさそうだった。
- ・もともとよく子どもにちょっかいを出している。特に変化はない。

③ 子どもの変化

- ・お風呂でお父さんにいろいろ聞いた。
- ・以前は女の子のパンツをおろしたりしていたが、受講後はなくなった。内容を理解して、興味がなくなったためか。
- ・お父さんに「性器がちゃんとあったこと」を話していた。以前は、人前でおちんちんの話をしていたが、受講後聞かなくなった。
- ・子どもが「自分はトンネルから出てきた」というていた。以前はママと結婚すると言っていたが、他の人と結婚すると言っている。母親とは結婚できないことがわかったようだ。おっぱいの触り方が、はじらいと、懐かしさを含んだ感じになってきた。

3) 子どもから受けた質問と対応について

- ・精子と卵子について時々忘れるので、聞き返す。→聞き返すたびに答えた
- ・赤ちゃんはどこから生まれるの？→最初はお腹を切って生まれたと説明しようと思っていたが、お風呂にはいったときに「ここ」から生まれたと示した。

4) 受講したことが役に立ったかについて

- ・友人のお母さんと話をする中で、「知らない人」の定義を決め、(知らない人について行かないための) 解決策を見出した。
- ・自分を守ることに关する話が良かった。いたずらに关しての話が役に立った。
- ・自分が女性なので、男児のことがよくわからなかった。いろいろな人から話をきいてわかった。
- ・以前、月経血がでているのを子どもが見て「どうして血がでるの」と聞かれ、「あなたがおりこうさんじゃないからこうなるのよ」と言ったことがあった。けれども今思えばいけなかったと思っている。ごまかしたり、うそをつかないようにしようと思った。

5) 意見など

- ・幼稚園のお母さんを対象にやってほしい。
- ・ディスカッションする時間がもう少しほしかった。
- ・自分を大切にして他人を大切にする、身を守るなど、今の性教育をきちんとしてほしい。

VII. 倫理的配慮

なお、当日のビデオ・カメラ撮影、質問紙の記入については、目的および活用方法について十分説明し同意が得られている。

VIII. 考察

受講前・受講直後・受講後1カ月の調査結果をもとに、それぞれの目標について考察する。

1. 幼児に対する目標について

目標1) 幼児にとって関心のあると予測される、男女の違いや性器の違いについて学ばせる。

目標2) 受精から赤ちゃんが誕生するまでのプロセスについて理解させ、生命の大切さ、身体の大切さ、ひいては自分自身や人を大切にすることを学ばせる。

対象児は、紙芝居の間、うろうろしたり、他のことをして遊ぶことはなく、比較的集中して聞くことができていた。発問には大きな声で応え、お話に関連した事柄で、話したいことがあれば自分から発言していた。男女の赤ちゃん人形にも関心を示し、お話の終了後に、抱いたり触ったりしていた。受講直後調査の結果からの子どもの話の理解度は、親が子どもの様子を見て判断した、間接的な尺度であるため、今後子どもに直接質問して答えさせ、教授効果を測定することも検討する必要がある。受講後1カ月調査の結果では、お話の内容(精子、卵子という言葉)を覚えて置くために書き留めるという行動が見られた対象児もあり、簡単に暗記できる事柄は、記憶にとどめてようとしていた。しかし、親が見た理解度が示しているように、身体の大切さや命の大切さのような抽象的な概念について理解することは、

対象児にとっては難しいと推測される。従って、教授内容を精選し、どのような知識どうしを結びつけることが必要かを再検討する必要がある。

受講後1ヵ月調査結果で、友達や母親に対する対象児の行動に変化が見られており、このことから、対象児の知識構造は変化していることが推測される。しかし、受講前の知識構造については不明であり、受講後どのように変化したのかについて明確化するための発問ではなかった。今後、知識構造がどのように変化したのかを見るための発問系列を検討する必要がある。

2. 親に対する目標について

目標1) 自分自身が性についてどのように考えてきたかを振り返らせる。

受講前・受講直後調査結果から、親自身の性についての考えについて、「とても肯定的」、「肯定的」の答えの変化は見られなかった。「自分の性に関して考える機会になった」と全員が答えていることから、今回の講座を受講することによって、性について考え直す機会になったと推測される。

目標2) 4～5歳児の成長・発達の状況や性に関する関心の程度などを理解させる。

受講直後調査の結果では、理解度に関して、「とてもできた・3名」、「まあまあできた・5名」と答えており、理解できなかったと答えた親はいなかった。また、「受講者の具体的な話がとても役に立った」や、「話し合いの中で考える余裕ができた」と記述されていたことから、ディスカッションの時間にお互いの悩みを出し合ったり、意見交換することが有効であったと思われる。

目標3) 家庭での性教育に関する方針を見いださせる。

受講直後調査の結果では、性教育の方針を「見出せた・3名」、「少し見出せた・5名」と回答していることから、ほとんどの母親が性教育に関する方針を見出すことができたと考えられる。「躊躇せず自信をもってできる」、「(子どもからの質問に対して)すぐに答えを出さずに少し間をおいて話そうと思う」などの具体的な記述がみられていることから、対処方法について考えるきっかけを今回の講義やディスカッションが与えたと思われる。また、受講後1ヵ月調査では、母親は受講後同じ性別の子どもを持つ母親と話すようになっており、情報交換をすることで、お互いの問題を解決しようとする姿勢が伺われた。さらに、自信をもって性について話すことができるように変化してきている。さらに「子どもの質問にきちんと答えるようになった」という変化の見られた父親もあり、受講後に性に対して前向きに行動するようになってきていると考えられる。

3. 講座に対する意見などから

受講後、親からは、子どもたちに「誘いにのらない」、「誘われたときの断り方」など、対象児が自分自身で身を守れるような具体的な方法を教えてほしいという希望や、性被害に遭わないようにもう少し性器や体の大切さを具体的に説明してほしいという意見があった。こ

これらの意見を取り入れて教材化した場合、対象児（４～５歳）がどれだけ理解できるかを含め、今後さらに内容の精選を行う必要がある。

また、４歳になったばかりの幼児にとっては、「遊びに行ったと思っている」ようだと親が記述していることから、対象児と教授内容とのさらなる対応と検討が必要である。また、教材については、動きのある教材がよかったのではないかという親からの提案があった。今後、教材を含めた教授プラン全体を再度見直し、改善する必要がある。

IX. まとめと今後の課題

今回、４～５歳児とその親を対象とした性教育を実施した。受講前・受講後・１ヵ月後の調査および、ディスカッションを通して次のようなことがわかった。

1. 対象者の実態

1) 対象児の実態

親に対して「赤ちゃんはどこから生まれてくるのか」や、「女の人はどこからおしっこするのか」、「なぜ毛が生えるのか」等について質問している対象児もあり、男女の違いや大人との違いについて気づき始めていることが伺えた。

2) 親の実態

家庭で意図的、計画的に性教育を行っているとは推測される親は８名中１名で、それ以外の親は、子どもからの性に関する質問に対して答えを準備できておらず、困惑することがある様子だった。このような状況を背景に、受講の動機については、子どもに性に関する事柄をどこまで、どのように話していいのかわからない、性の重要性を説明したい等が挙げられた。

2. 教授内容について

1) 子どもの教授内容に関する理解の状況と変化

親からみた間接的な尺度ではあるが、対象児にとって簡単に暗記できる事柄は、記憶に留めようとする行動も見られたが、身体の大切さや、命の大切さのような抽象的な概念について理解させることは難しかったと予測される。一方、受講１ヵ月後調査では、友達や母親への行動に変化が見られていることから、教授した事柄が行動に変化を起こすきっかけになっていたと考えられる。

2) 親の教授内容に関する理解の状況と変化

講義に関してはとても理解できた・まあまあ理解できたと答えおり、さらにディスカッションを通して、具体的な対応方法に発展させて考えを深めていたことが推測された。また、受講後には、性に関する情報交換をする行動や、子どもの質問に対して前向きに対応する姿勢もみられ、教授した事柄が行動に変化を起こすきっかけとなっていたと考えられる。

3) 希望、提案、感想など

親からは、対象児が自分自身の身を守るための、具体的な方法を教えてほしかったという希望があった。教材については、今回は紙芝居と男女の赤ちゃん人形を用いたが、動きのある教材についての提案があった。4歳になったばかりの幼児にとっては、「遊びに行っただと思っている」ようだと言っていることから、目的としていた教授内容は対象児にはうまく伝わっていない可能性がある。

前述した対象の実態と教授活動内容の検討から、今回教授した事柄が、対象児とその親の行動に、ある程度は変化を与えたものと考えられる。しかし、親の目を通して子どもの変化を見ていること等から、どの教授項目がどの程度それぞれの行動の変化に寄与したのかは、残念ながら不明確である。従って、今後、教授効果について精査するためには、対象児と親に対して、教授項目に対応した直接的な調査項目と、教授内容に沿った発問系列を再検討し、その応答を解釈することで、教授効果を評価することが必要である。また、教授目標、内容、方法、は同時に¹⁴⁾考えるべきなので、対象の実態や教材の適切性を含めた教授プランについて、さらに検討する必要がある。

X. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、九州大学大学院人間環境学研究院 久米弘助教授に多大なご指導、ご助言をいただいた。また、シナリオの作成に際して、筑紫女学園短大、保育科講師：原田博子先生にご協力をいただいた。

引用文献

- 1) 細谷純(1983)「プログラミングのための諸条件」,講座 現代の心理学 3 学習と環境小学館 p.358.
- 2) 細谷純(2001) 教科学習の心理学 東北大学出版会 p.174.
- 3) Vygotsky, L.S.(2000) .Thought and Language (Myshlenie. I. Rech', Trans.): The MIT Press(Original work published 1934).
- 4) 久米弘(2003) 教育技術論 第10回(1月10日) 講義ノートより.
- 5) 小澤道子(1996)「こどもの成長発達をふまえた母子の看護」,看護学大系 11 母子の看護 日本看護協会出版会 pp.211-220.
- 6) 舟島なをみ(1998) 看護のための人間発達学 医学書院p.61.
- 7) 前掲書 2) pp.123-124.
- 8) 大谷真千子(1994)「性に関する援助技術」,看護学大系 7 看護の方法[2] 日本看護協会出版会 p.214.
- 9) 同上.

- 10) 村瀬幸浩(1996)「性教育とは何か その理念と目標」,性教育—その考え方・進め方
あゆみ出版p.21.
- 11) 松本友子(2000)「人の性と支援」, 臨床助産婦必携 医学書院 p.13.
- 12) 前掲書10) p.16.
- 13) 浅見千鶴子他(1992) 乳幼児の発達心理〔0歳～6歳〕大日本図書 p.145.
- 14) 前掲書2) p.203.

注1)、注2) 性教育実施までのプロセス

M市女性センターでは、2001年に初めて「子どもに性を伝えるために・大人が学ぶ性教育入門」というテーマで、大人を対象とした性教育の講座を開催した。幼児とその親を対象とした性教育を実施したのは、今年度からである。2002年4月26日にM市女性センターより、幼児とその親を対象とした性教育の実施依頼を受けた。M市女性センターの企画担当者と本学の担当で、対象とする幼児の年齢、人数、実施時間、教授内容と全体の構成等について、8月29日の実施までに、2回の打ち合わせを行い、決定したことを次のように広報した。

親子で学ぼう 性ってなあに？

幼児の性教育を考えたことがありますか？

子どもだからまだ早いとか、聞かれても恥ずかしくてごまかしたりしていませんか？性を知ることは、自分自身の心と体を守る大きな力になるはず。性的虐待などから子どもの心と体を守るために、そして、あなた自身のために正しい性の知識を学びませんか？この講座は4歳～5歳のお子さんと親を対象に開催いたします。

日 時 平成14年8月29日(木) 午後1時30分～午後3時30分

場 所 M 202会議室

定 員 4～5歳のお子さんと親：10組

託 児 要予約(1歳～4歳未満)

講 師 日本赤十字九州国際看護大学 小林益江教授 他 助産師3名

写真 1．受講前の様子



写真 2．受講中の様子

